



## 簿記は最初に手にしたビジネスの道具。 中国で日本の資格といえば“全経簿記”

上田 泰弘さん 全経簿記能力検定上級 取得  
(株式会社決断サポート 代表取締役・税理士  
大連明決信息諮詢有限公司 董事長)

### (1) 簿記を学ぼうと思ったきっかけは何でしょうか

子どもの頃から数字が好きで、数字を扱う仕事に“税理士”があると知ってから、将来なりたいと思うようになりました。その後、大学受験に失敗し、税理士試験の受験資格に必要なだったため、簿記を勉強し始めました。

### (2) 卒業後の簡単なお経歴をお聞かせください

税理士事務所です約9年間勤務した後に、コンサル会社を設立して独立し、その2年後に税理士事務所を開所しました。この2組織が基礎となり、その後、いくつかの会社の設立、合併、提携などを経て、現在の決断サポートグループを形成しております。

### (3) 中国事務局の運営に携わるようになったのはどういったきっかけでしょうか？

税理士事務所勤務時代のクライアントが中国に進出しており、その現地の財務コンサルをお願いされたのが中国でビジネスをするキッカケになりました。そんな中、現地で日本式簿記の普及の必要性を感じ、自身の母校の恩師を通じて全経本会に中国での検定試験の実施をお願いして、中国事務局立ち上げとなりました。

### (4) 簿記を取得して良かったと感じたのはどんな時でしたか？

私自身中国語は出来ませんが、中国で仕事をするうえで、簿記の理解だけで中国人と分かり合えているという場面が多々あります。ビジネスの共通言語である簿記は非常に魅力あるスキルだと実感しています。

### (5) 中国で日式簿記を普及するために大変だったのはどんなことでしたか？

日式簿記の普及は、中国現地の日本人ビジネスマンの10人中8、9人は必要だと言われる程ニーズを感じましたが、当時は尖閣諸島問題で日中関係は最悪の状態でしたので、受験当事者である中国の方へのアプローチは難航しました。

最初は「全経」という組織についての信用がない状態からのスタートでした。毎日のように「全経」について説明してまわり、受験してくれそうな大学などへアプローチをし始めて

から、少しずつ反響を得て、併せて受験者も伸びていきました。

現在では、中国で日本の資格といえば、日本語能力検定と全経簿記という認識が広がっています。

**(6) 一番嬉しかった出来事はどんなことでしたか？**

2019年に本プロジェクトにより日式簿記を勉強し、全経簿記に合格した7名が日本の会計事務所等に採用されました。日中相互理解の深化としての達成感がありました。

**(7) 今後の展望などありましたらお聞かせください。**

コロナによる大学閉鎖などで受験会場が長らく閉鎖されましたが、このことはIBTへの大きなキッカケとなりました。広い中国にあって、受験会場が遠かった方にも受験機会が増えることで、日系企業に資する人材育成と日中友好の裾野が広がることを期待しています。

**(8) 「簿記」とはご自身にとってどんな存在ですか？**

ビジネスをする上で、最初に手に取った道具。手段であり、ツールでもあります。そして、世界共通で通じあうことができる、ある意味外国語よりも万能なものだと思っています。